公益財団法人 日本骨髄バンク 第87回 業務執行会議 議事録

開催方法：コロナ禍の影響によりWEB会議形式で開催
（本会議をWEB開催することに関して全理事の同意を得た）
日　　時：2022年（令和4年）12月9日（金）17:10～18:30
出　　席：小寺 良尚（理事長）、岡本 真一郎（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）
浅野 史郎（業務執行理事）、加藤 俊一（メディカルディレクター）
石丸 文彦（理事）、鎌田 麗子（理事）、鈴木 利治（理事）、瀬戸 愛花（理事）
橋本 明子（理事）、日野 雅之（理事）、福田 隆浩（理事）
三田村 真（理事）、椙村 岳央（監事）、藤井 美千子（監事）
欠　　席：高橋 聡（理事）
陪　　席：山崎 翔（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室室長補佐）
石川 理矢子（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室係長）
事 務 局：小川 みどり（事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長）、田中 正太郎（総務部長）
中尾 るか（ドナーコーディネート部長）、関 由夏（移植調整部長）
渡辺 良輝（広報渉外部長代理）、戸田 泉（ドナーコーディネート部ＴＬ）
竹村 肇（総務部）、上原 淳（総務部）
（順不同、敬称略）

1）　開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

2）　業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第6条により本業務執行会議が成立した。

3）　議長選出

業務執行会議運営規則第5条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

4）　議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第8条により議長と出席した副理事長が記名押印する。小寺理事長と岡本副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

5）　議事録確認

前回（2022年11月11日）の業務執行会議議事録を全会一致で了承した。

〔議　事〕

6）　報告事項（敬称略）

（１）各種課題取組み状況

スワブ導入に向けて

小川事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長が資料に基づき説明した。

スワブでのドナー登録時ＨＬＡ検査導入に向けて予算要望をしようと準備している。スワブ導入の目的である。そもそも今は希望する患者の半分しか移植できていない。ドナープールも高齢化で縮小傾向である。今と同等の移植件数を今後も確保するためには、30 代以下の年間新規ドナー登録者を今より毎年１万人増やす必要がある。この数字は加藤メディカルディレクターに解析してもらい導き出した。ドナーが若い方が移植成績がよいという結果が世界中で出され定着している。ドナープールの規模を確保していくためには長く登録できる若いドナーを増やしていく必要がある。移植のニーズとドナープール安定化、両方の側面から増やすのであれば若年層を増やそうと考えている。そうなると今のように献血人口だけを対象にしているだけでは難しい。今後はオンライン登録でスワブを用いて効果的にドナー登録を増やす必要がある。初期費用を要するものの将来的にはコストダウンに繋がると考えている。同時に、スワブを導入さえすれば若いドナーが集まると考えている訳ではない。当然様々なＰＲ活動が必要なので、そこも今注力して進めているところである。

（主な意見）

＜小寺＞　今日、岡本副理事長、佐藤副理事長、小川事務局長、田中部長と厚労省の移植室へ行ってこの件について率直に意見交換して来た。これは来年以降のバンクの新しい取り組みの核の１つになるものだと思う。厚労省も大変前向きに考えていただいている印象を今日は受けた。引き続きお願いしたい。

ドナー応諾率向上WG

小川事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長が資料に基づき説明した。

ドナー応諾率向上WGは、適合したドナーの半数以上が初期段階でドナー理由終了するような現状を打開すべく、フォーカスすべき点や優先順位を決めて応諾率向上に取り組むための戦略を立てることを目的に設置した。岡本先生を座長として、日野理事、福田理事、瀬戸理事にもメンバーとして入っていただいている。これまでの取り組みの一部をご紹介する。

１つ目は、新規ドナー登録の呼びかけ、既登録者のリテンション強化について、これまで色々なことをしてきたが、とにかくフォーカスすべきは若年層であることを確認した。今更感があるかもしれないが、このようにきちんと確認できたのは大きな意味がある。これまでも若年層について色々取り組んで来たが、さらにできることがある。若年層にフォーカスすることを念頭に置いて、ホームページのリニューアルを準備中。適合した段階で、分かりやすい情報を若いドナーに提供したい。一目で分るようなコーディネート期間や流れ、職場や家族への説明書を掲載している。次は、同じ理由で終了を繰り返すドナーについて。何度もコーディネートに上がるが、毎回同じ健康理由で終了するドナーが一定数いて、例えば脂質異常や糖尿病である。これらの方は終了時にドナープールから外す保留期間をこれまで１年間だったが、ドナー安全委員会でご議論いただき５年間に延長した。

さらに、世の中に伝えたいことを決める、困っていることを言い続けることが大切だということを確認した。世の中から見ると骨髄バンクは「何とかなっている」「何とかうまくやっている」と思われ、その時点で人ごとになってしまう。私たちはこんな風に困っているのだと具体的に伝えて協力してくださいと言い続けることが大切だという姿勢でＳＮＳを活用し Instagram や Twitter を中心に若年層に働きかける。今もやっているがマンパワーの点

でも最大限に活用できていなかった。この点にしばらくは注力して戦略を立て、来年から頻回に配信していくということで、若い職員中心に動いているところである。

岡本副理事長が口頭で説明した。

私からは特に追加することはないが、このドナー応諾率向上WGは若年層ドナーのリクルートから応諾率を向上させ、かつそれを維持するというところで、どのようなアプローチができるかを議論した。決して新しい取り組みではなくて、これまでもこのようなことが必要であることは何回も理事会にも上がってきたと思う。これまでそれが実際にインプリメントされなかった。実際にどうするかという方向に動かずに必要だねというところで終わっていた。今回はこのような形で本当に前に進ませようということでWGを進めていきたい。それを実現するためにこのWGのメンバーの医療サイドの理事の方たちと事務局が具体的に進捗等なり進めるときの問題点などを共有してフットワーク軽く進んでいくことが不可欠になるので、瀬戸先生に忙しい中申し訳ないが事務局との連携について密に橋渡しというかうまくブリーチングしていただく役目になっていただきたい。このWG担当専任理事でも良いのだがしっかりここをバックアップしていただいてこのWGの成果を上げて行きたい。そのように承認いただきたい。

（主な意見）

＜小寺＞　このWGは大変集中的にやってくださって、これが本当のアウトプットに繋がるような時期に来ている。そのような意味で岡本副理事長が言われたようにこのWGと実務と担当する事務局、場合によっては学会に所属する医師たちと要になるような方、それに専従していただける方を理事の中から選ぼうという考えだと思うが、瀬戸理事にこの役割をお願いしたい。皆様異論ないか。

＜一同＞　異議なし

＜小寺＞　瀬戸理事は引き受けていただけるか。

＜瀬戸＞　はい。

＜岡本＞　瀬戸先生に入っていただいて連携を取るのだが、ドナー応諾率向上は何回も出て来たテーマで今回はぜひともこれは前に進めたい。瀬戸先生に全部お任せするわけではなく瀬戸先生を中心に私達全員が本当に真剣になってやるという気持ちでいる。バンクの事務局の方たちも本当に真剣になって対応いただきたい。

期間短縮WG施策

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

昨年実施した期間短縮WGの施策として、患者移植の希望時期に合わせて確実にプロダクトを届けるための取り組みである。バンクは今までもずっとコーディネート期間短縮に取り組んで来たが、期間短縮WGではこれまで中々考えてこなかった部分まで踏み込んで政施策を考えた。その取り組みを継続して、今般新たに導入したのが適格性判定医師という専任の判定医師の導入である。今はドナーの適格性判定を全国30名の地区代表協力医師に依頼している。確認検査判定について事務局で振り分けて判断できるものは事務局で良いというやり方を新しく取り入れたのも施策の一つである。今回はそこからもう一つ踏み込んで、ド

ナーの適格性判定を専任医師にお願いすることで業務の効率化を図り期間短縮に繋げる。それだけでなく、地区ごとに採取施設の考え方、地区代表協力医師の経験数によっても判断が異なることがあり最初は適格であったのが採取の直前になって不適格になってしまったことも散見されたので、もう一つの大きな目的として判断の統一化を目指す。そのために日野先生を座長とするドナー適格性判定WGを設置し実行していくための様々な検討していただいている。実際の判定医師は理事でもある瀬戸先生と初期相談医師をしていただている飯田先生の２人でまずはスタートする。ドナー適格性判定WGでの検討や、全国の地区代表協力医師に説明会を既に実施して、来週の月曜日から、まずは初期行程のところから判定医師の判定をトライアルとして実施する。そのトライアルで様々な事象が予想されるので、引き続きドナー適格性判定WGで検討をして、来年３月以降は初期行程だけではなく確認検査行程も含め、選定前までは専任医師による判定に統一したい。

（主な意見）

＜小寺＞　瀬戸理事の負担は大丈夫か。

＜瀬戸＞　大丈夫だと思うが、うまくいかなくなったら相談する。

＜小寺＞　地区代表協力医師の役割は今よりも減るのか。

＜中尾＞　今は負担が過度になっているが、負担軽減もここで果たせる。本格導入後は選定までを専任の判定医に統一してお願いし、選定後は各地区の状況が重要になるので地区代表協力医師に引き続きお願いする。

＜小寺＞　これも大事なポイントでバンクの命運がかかっていると言っても不思議ではない。コーディネート期間短縮の最初のステップをよろしくお願いする。

リモート面談について

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

リモート面談も期間短縮WGで検討した施策の一つである。これまでも伝えているようにコロナ禍でリモートにならざるを得なかったという現状がある。バンクとして今まで考えもしなかったやり方のコーディネートがコロナ禍で発生した。しかし現状のリモート面談はあくまでも１人でも参加を減らすために立会人がWEB会議システムでリモート参加する方法と、家族同席が難しいときにスマートフォンをスピーカーフォンにして声だけによる参加のリモート面談しかない。せっかくコロナ禍でそのようなノウハウを身に着けたことから、さらにドナーや家族の利便性を図ることで期間短縮や応諾率の向上にも繋げられるのではないかと考えている。ここで示しているのは確認検査のことである。確認検査のリモート化はバンクとしてはまだしていない。コーディネーターの成り手不足と、コーディネーターの高齢化によってコーディネーター不在のエリアがあり、そこでは、別のエリアからコーディネーターが応援として行かざるを得ない状況である。あるいはドナーにコーディネーターがいるエリアに動いてもらうこともある。ドナーにとって利便性が良いとは言えない状況もあるので、確認検査もリモート化して行きたいというのがここで示しているプランである。確認検査の主な内容はコーディネーターからハンドブックを用いて詳しい説明をする面談の部分と、病院に所属している調整医師が行う健康チェックのための問診と採血である。問診と採血は病院に行っていただかないとできないことであるので、ここは残すとしてもコーディネーターからの説明を必ずしも病院に来てもらってコーディネーターが長時間かけて説明しない

とできないかというと決してそうではないという考え方である。既にハンドブックの説明動画を作成した。現状は確認検査のハンドブックの説明は各コーディネーターのスキルによりばらつきもあるが、読み上げるだけでも１時間かかる。それをやめて動画にすることでポイントを絞った説明が可能になる。それをドナーに事前に観てもらって質問対応や補足説明、ドナー状況の聞取りをコーディネーターが電話あるいはタブレット等でリモートで実施して、その上で確認検査の問診と採血の日程調整をしてドナーに行っていただく。こうすることでドナーの施設滞在時間を短くし仕事を１日休まなくても職場に1～2時間で戻れるということになれば都合をつけられ調整期間の短縮や応諾率向上にもつながるというメリットもあるかと思っている。実際にコーディネーターが不在で困っているエリアからトライアルで導入したい。これを実施するためには調整医師の協力も必要になって来るので、その辺りをどのようにやっていくのかは検討していく必要がある。このような構想で今は検討を開始している。

（主な意見）

＜福田＞　iPad で画像も一緒にというのは難しいのだろうか。

＜中尾＞　そこも視野に入れている。ただそうするためにＷＥＢ会議ツールを使う時のリスク対応をどうするかも合わせて検討していく必要があると認識している。その辺も解決しながらドナーの希望に応じて画像付きでするのか電話だけでするのか選択できればよりドナーの利便性は高まると考えている。

＜福田＞　ＷＥＢの安全性ということか。

＜中尾＞　はい。

＜福田＞　それは待っていても中々解決しない問題なのかなと思う。以前に日野先生がトライアルでされていたと思う。その情報を持って少しずつ進めてみるのもいいのではないか。説明するときに電話だけでするのは私達でも難しい。顔を見ながら、表情を見ながら、頷きを見ながらの方が遥かに進めやすいと思うので、ぜひ画像も含めて検討いただければと思う。

＜中尾＞　現行のリモート最終同意面談での、スマートフォンの通話だけのところに、画像を入れることも今考えている。日野先生からいただいた資料を参考に、リスクに関しては同意書をドナーに書いてもらおうかと考えている。そちらも同時に検討している。福田先生の言う通りだと思うのでそちらも合わせて進めていきたい。

＜日野＞　これはぜひ進めて頂きたい。というのはコロナ禍で豊嶋班が厚労科研を使わせていただいて行っている。最終同意面談は全国で、確認検査は近畿でして報告書にまとめている。それが前提で iPad を購入したので、これが動かないとそこに齟齬が出てきてしまう。ＺＯＯＭに関してはコロナ禍で家族が病院に来られないので既に使っていてそれは問題ないと思っている。１番懸念しているのはドナーが面談を録画してＷＥＢに挙げてしまうことである。ドナーのプライバシーというよりも調整医師やコーディネーターのプライバシーが気になっていたので、それは同意書をいただくことで可能ではないかと思っていた。

＜中尾＞　日野先生のところでうまくいったというのも重要な情報としてある。ただコーディネーターが行かない形で確認検査をするとなると調整医師に渡している問診票をどのようにやりとりするか、コーディネーターなしで本当に調整医師が協力

してくださるかなど、その辺りを慎重に進めて行く必要があると思っている。日野先生の病院のような、それが可能な病院からまずは広げて行きたいと考えている。

＜日野＞　それに関して私の厚労科研でＨＣＴＣとバンクのコーディネーターの協同をテーマでやっている。当院でもＨＣＴＣにかなり協力してもらってやっているので、施設のＨＣＴＣの協力は必要だと思っている。

＜中尾＞　ＨＣＴＣにも相談して、やると言われたら協力するけれども厳しいところもあるかもしれないという意見もいただいているので、もう少しその辺りも負担を減らせる形でできるのかどうかを検討して行きたい。

＜小寺＞　タイムスケジュールはどのようなものか。

＜中尾＞　動画は作成しているので、コーディネーターが足りないところから実施というのは年度内に始められれば良いなと思っている。スタンダードにしていくためには色々と整えていく必要があると思っていて、それには予算や機器の問題があると思っている。トライアルはなるべく早くと思っている。

＜小寺＞　豊嶋班、日野班との連動、各施設のＨＣＴＣとの連動というのは十分に考えてやっていただきたい。

スマートフォン紛失事案の再発防止策

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

発見されていないというところは変わっていない。紛失事案を受けて今までのルールや取扱い方など全部見直しをかけて、足りないことがたくさんあったということで対策に取り組んでいる。ここに挙げているのはまだ業務執行会議で報告していないその後のものである。まずはスマートフォンの取り扱いルールを改定して 10 月末に発出した。大きな変更点としてはこれまで働き方という観点からコーディネーターのスマートフォンは事務局同様に 9 時に電源オンにして 17 時半に電源オフのルールしかなかったが、それでは現実にはドナーとの連絡に不具合が生じるので、ほとんどのコーディネーターはこの時間以降にも仕事をしていたという現状がある。紛失の時に一番困るのは電源がオフになっていて位置情報がとれないことである。今回もその状況で問題が大きくなってしまった。電源は常時オンにすると変更した。ただ電源を常時オンにするということと、常時仕事をしてくださいというのはイコールではないということをコーディネーターに明確に伝えた。これまで同様、コーディネーターの善意で期間短縮につながったことは事実であるが、それがすべての場面で必要かと言えば決してそうではない。明日の返事でも大丈夫だというものを見極めて、時間外は留守番電話対応で良いと明確に伝えた。それから外への持ち出しも同様で、コーディネーターは常にドナーと連絡が取れなければいけないとある種の強迫観念、頑張りのせいでどんな時でも持ち出して、今回の紛失事案も里帰りに持って行ったということが問題の発端であったことから、不要な場合は外に持ち出さないと明記した。特に宿泊を伴う場合は注意が必要ということで、事務局としっかり相談しながら、コーディネーターが全部持っていてやらなければいけないかというと、事務局が代わりにできることもたくさんある。不要な場合は持っていかない。ただし持っていく場合にはこのようなことに気をつけなさいというかなり細かいルールを発出した。もう 1 つ大きなこととして、先生方からもこれが 1 番大事だと指摘を受けていた端末にメールが残らないアプリの導入ができないかシステム担当者を中心に探し

たところ、今まで使っていたものに近い形で使えそうなモコナビというアプリがあった。これの導入に向けて既にトライアルを開始している。トライアルしてみると使い勝手が良くなく使い方に注意が必要だということが分かって来ている。それでもやはり Outlook のような端末に残ってしまうのは問題が大きくなる物なので、このようなアプリを上手に使う必要性を重々認識している。これの導入に向けてスタートしている。来年 2 月にスマートフォンの機種変更を予定しているので、その時に合わせて導入予定である。

（主な意見）

＜小寺＞　端末に残らないようにするのはコーディネーターの仕事に差し支えないか。

＜中尾＞　以前は Prog Office という端末に残らない仕組みのアプリを使っていたが、そのサービスが終了になり、その時点で代わりが見つからずに Outlook になった。

＜小寺＞　新しいアプリが見つかったということか。

＜中尾＞　はい。

＜小寺＞　スマートフォンの機種変更の予算はどのようなものか。

＜田中＞　もともと契約期間があって予算に入っていたもので突発的なものではない。予定通りで問題ない。

ホームページ更新プロジェクト

渡辺広報渉外部長代理が資料に基づき説明した。

今回ホームページを新しくする目的である。長年の運用によってコンテンツが増加し、見づらくなってしまったホームページを、ドナー登録を考えている若年層をターゲットにコンテンツの整理を行う。目的のものにたどり着くのに深い階層に何回もクリックしなければいけないというところと、情報が増えすぎているところもあるので、これを見やすいものに大きな目的として今は若年層をターゲットに色々な活動に注力している中でドナー登録を考えている若年層に見てもらって登録してもらえるようにということで、テーマを「心を動かし、行動を促すサイト」とした。今見ていただいているのは業者提案のイメージである。2022 年 5 月にこのためのプロジェクトチームができて広報渉外部の大上がプロジェクトリーダーをしている。9 月に業者説明会を行い最終的にこのような提案をしてくださったコネクティという会社が選ばれた。昨日も戦略フェーズ擦り合わせのためのミーティングを行った。コネクティの方で非常にバンクについてドナー側のことも患者側のことも担当者が勉強してくださっていてバンクの立場に立って、今回目指している第一の目的、若年層の心を動かす。それからドナーリテンション、登録している方にドナーとして呼ばれたときに動いてもらえるような情報も十分載せてあるもの。それから募金である。非常に経済的な部分も大切である。この 3 つ、トッププライオリティは若年層の心を動かす、登録に結び付けるというところであるが、このようなテーマで現在進めている。リリースは 2023 年 7 月を予定している。昨日の第 1 回目のミーティング以降、各部のプロジェクトメンバーにも当面は週 1 回のペースで参加いただいて形を作って行く。

（主な意見）

＜小寺＞　業者提案のイメージがトップページになるのか。

＜渡辺＞　これはイメージである。このようなものが良いのではないかと提案するというサンプルページである。
＜日野＞　私も時々バンクのホームページに行くが中々目的のものに達せない。すごい使い難くなっていると思っていた。ぜひ改修していただければありがたい。
＜小寺＞　人によって何を知りたいかは随分違うのだが、我々にとっては目的のものに到達し難いことがよくある。色々な利用者がいるのでそこをよく考えてやって欲しい。
＜渡辺＞　業者の方からも、こう行けば色々な情報にたどり着きやすいというロードマップも提示いただいているので分かりやすいものができるのではないかと思っている。

事業報告書のフォーマット変更
小川事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長が資料に基づき説明した。

毎年、事業報告書を作成して理事の皆様にも見ていただきホームページにも公開している。現行の書式は文字ばかりが並んでいて最後に参考資料を付け加えている形である。変更案として今後は説明にデータを組み込む形で、このような課題があるので今年度はこうした取り組みをした。結果このような成果が出たと端的に分かりやすくする校正にしようと考えている。結果に基づきバンクとしてはこう考えるという考察も付け加えようと思う。見た目はこのような感じになるかと思う。文章とグラフで課題「ドナープールは高齢化している」、だからこのように取り組み、結果はこうでした、今後はこうしようと考えているというような中身である。できた段階で案を提示するが、今回はこうしたいという予告である。グラフやデータの解析はメディカルディレクターの加藤先生に相談しながら進める。

（主な意見）
＜小寺＞　事業報告書はＷＥＢでも見られるのか。
＜小川＞　はい、ホームページで公開する。
＜小寺＞　毎年全国大会の事業報告もある。あれにもこの方式が反映されるのか。
＜小川＞　はい、そのようにできればと思う。
＜小寺＞　ビジーなページにはならないように、要点をしっかり伝えることが大事だと思う。どこのホームページもそうかもしれないが、バンクも見ていると随分ビジーな感じのするところがあるから気をつけてやって欲しい。

2023 年度版チャンス改訂
渡辺広報渉外部長代理が資料に基づき説明した。

毎年年度の始めにドナー登録のしおり「チャンス」を更新している。毎年、受付窓口情報のところが古くなっていないかを見て更新するだけが多かったのだが、今回は内容順と内容変更を大きなポイントにして改訂に取り組みたい。4 月 1 日に新しいものが出回らなければいけないので日程的にはタイトである。今は説明する側、あるいは取り寄せて読むドナーにとっても、分かりづらい順番、校正になっている。今は表紙を開くと、国と日赤と骨髄バンクの役割が真っ先に出てくる順番になっている。これが果たして登録したいという方が 1 番

見たい情報なのかというようなことも考えて、まず順番を大きく入れ替える。まずはなぜドナー登録が必要なのか、あなたに登録して欲しいのか、登録の要件やコーディネートの流れなど重要なものから紹介していくような感じで、優先度の高くないものに関してはその他資料として見てもらうような形に変更を予定している。時間のない中で日赤や対策室の先生方に協力をお願いすることになると思うがよろしくお願いする。

（主な意見）
＜小寺＞　いつ新しいのができるのか。
＜渡辺＞　毎年4月1日に新しいのが出ている。そこまでに間に合わないといけない。既に各部長にアイデアを集約していただいているところである。
＜小寺＞　たしかにバンクの組織の勉強ではなく、このような構成は良いと思う。
＜三田村＞　チャンスの頁数、ボリュームに変更はあるのか。
＜渡辺＞　バンクだけの判断でその情報を落としてしまって良いものかどうかも関わって来る。
＜三田村＞　現行のチャンスは何頁の冊子か。
＜渡辺＞　35頁くらいである。
＜三田村＞　今の時代、分かりやすくシンプルに伝えたいことを伝えるという意味では、4月に間に合わないとしても、行く行くは内容を精査して頁数を減らすというのも検討して欲しい。
＜小寺＞　理事の方々も含めて全体で考えることであるので、アイデアがあれば遠慮なく事務局にお寄せいただきたい。
＜橋本＞　分かりやすくするというのはすごく大事なことだと思う。ただ必要な情報を捨て去らないように、これが載っていなかったということがないようにして欲しい。ただ最初にチャンスを手にした人が知りたいことがシンプルに分かりやすく、かわいらしく整えて欲しい。

（２）調整医師の新規申請・承認の報告

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

令和4年11月2日から令和4年11月30日に新たに申請・承認された調整医師の人数は3名、異動や辞退はなかった。合計で1215名である。

（３）寄付金報告

渡辺広報渉外部長代理が資料に基づき説明した。

令和4年は今のところ前年度より多くの寄付をいただいている。ただ7月のバンクニュース発行以降は毎月ごとに減っていて11月は約620万円である。11月23日に読売巨人軍のファンフェスタがあって、天気の悪い中理事長に上京していただき寄付受けしていただいた。読売巨人軍から200万円の寄付をいただいている。実際にお金が入るのは今月末くらいになるのかと思う。そのような大きな案件もある。引き続き寄付をたくさんいただけるように、

これからバンクニュースを発行して寄付の電話も増える時期であるので、電話対応をしっかりして行きたい。

（４）移植件数報告

田中総務部長が資料に基づき説明した。

2022 年 11 月の件数は国内ＢM51 件、ＰＢ27 件、国際の提供が 1 件の合計 79 件であった。予算対比で 59%である。11 月末時点で昨年度と比較して 81 件下回る厳しい状況となっている。

（主な意見）

＜小寺＞　バンクとして大変由々しき問題である。1 つは造血幹細胞移植の幹細胞ソースが多様化している。その影響もあるが今日事務局で解析してくれたデータを見るにバンクドナーからの移植を望んでいながら臍帯血移植や血縁間ハプロ移植に移った時期の解析を事務局でしてもらった。だいたい 2 か月から 3 か月の間くらいにピークがある。ということは、それまで少なくともバンクドナーに期待を繋いでいる。したがってバンクが最も力を注いでいる期間短縮の実現をしていくことが移植件数の目減りを回復させるポイントではないかと思っている。これはそう簡単にできることではなく報告にもあったように色々な形で期間短縮を図っている。そのようなことで血縁ＨＬＡ適合同胞間移植と並ぶゴールデンスタンダードのバンクドナーからの移植を数において回復して行きたい。

（５）バンクニュース 61 号の発行について

渡辺広報渉外部長代理が口頭で説明した。

12 月 7 日に骨髄バンクニュース 61 号が発行された。今回はすべてのドナーに郵送した。7 月はショートメールでサイトに誘導する感じであったが、今回は全ての登録者に実物を郵送した。予算の関係もあっていつもよりボリュームの少ない見開き 4 頁である。骨髄バンク推進全国大会 2022in 広島で行われた「社会を変えるアイデアフェス」を特集してイベントのイメージカラーのデザインとなっている。これまで最後の頁ではだいたい住所、個人情報の変更があったら届け出て欲しいという案内であったが、今回は事務局長から「適合のお知らせをショートメールで送っているし、住所不明者へのショートメールでの発信も行っているので電話番号についてしっかりアナウンスした方が良い」という提案をいただいて「携帯番号を登録してください！」変更があった方はそれも直してくださいと強調して伝えている。バンクニュースが寄付やリテンションに繋がる役割を果たせればと思う。

（主な意見）

＜小寺＞　一見中々パンチの効いたバンクニュースになった。皆様のお手元に間もなく届くと思う。

（６）「アイデアフェス開催レポート」のＷＥＢ公開について

渡辺広報渉外部長代理が口頭で説明した。

バンクニュースで特集した「社会を変えるアイデアフェス」のレポートページができた。最初は目立つポスターがあって下に降りて行くと、なぜこのようなアイデアフェスを行ったのか、それから学生の様子を画像でも紹介している。1番観て欲しいのは6分弱の動画である。電通に撮影編集していただき、どのような感じで行われたのかよく伝わる動画になっている。学生に賞金や賞品をできない中で、学生も望んだことであるが、優れていたアイデアに対して電通がポスターを作成して実現に向けて働きかけをする。これは学生が作ってくれたスライドである。今映っている＃ずいずいカー、マツダスタジアムでドナー登録をしながら特等席で試合を観られる患者も応援できる席などのアイデアのポスターがこのような感じになる。電通のクリエイターが非常にレベルの高いものを作ってくださっている。これは＃ずいずいカー、キッチンカーと献血バスを一緒に出してやったら良いのではないかというアイデアである。こちらはマツダスタジアムでのピースドナーシート、「男子高校生2人は考えた。もしも、試合を観ながら命を救えたなら」ということを考えた。実際に野球を観ながらその席でドナー登録の採血は難しいと思うが、それに近い形で色々なスポーツチームに協力を呼び掛け、完全な実現ではなくてもアイデアで終わらせずに実装していく取り組みにこれから着手して行くフェーズに入っている。ポスターについてこれだけでドナー登録に結び付くような力のある物ではないと私達も分かっているが、「これ何だろう」「骨髄バンクおもしろいことやっているね」と少しでも興味を持っていただく露出になればと思っている。何か動きがあれば報告させていただく。

（主な意見）

＜小寺＞　ポスターについて私はとても付いて行けないなと思うがとても良いポスターである。

＜瀬戸＞　このポスターは誰宛に注目してもらいたくて作成したのか。

＜渡辺＞　学生が作ったアイデアであるので学校や献血ルーム、自治体に掲示してもらえないかと依頼する。見た人が「何だろうコレ」「骨髄バンク何かやっているな」というような注目に繋がればと思っている。

＜瀬戸＞　ポスターを作るときにどこに貼るかを考えた上でポスターを作っていかないと、先にアイデアを出してポスターをどこに貼るかというのはこれからというのは順番が逆かなと思った。

＜渡辺＞　そのような指摘をいただいている。これはもう1つ、学生へのご褒美的な意味もある。学生が自分たちのアイデアが実現できればうれしい。それが何か物をもらったりするよりもよっぽどうれしいという声があったので、優れたアイデアが綺麗なポスターになって、どのような形でも実現に繋げられればアイデアフェスの賞品というとあれだが、そのような側面も含めて良いのではないかと思っている。

以上